

景行天皇山辺道上陵の出土品

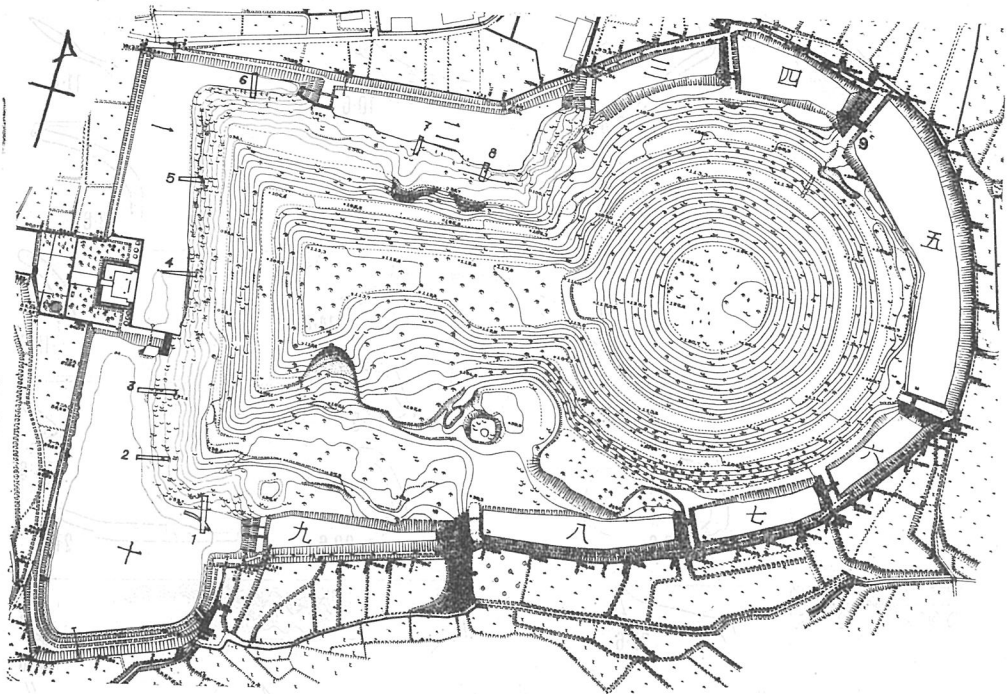
ここで紹介する景行天皇陵の出土品は、昭和46年冬に表面採集された遺物（第一遑から第二図1・第五図79、第一遑か第一〇遑から第三図30・第四図65・69・第五図88・103）と昭和49年春の表面採集品（第一〇遑から第三図42・第五図78・82）をのぞくほか、昭和46年12月の墳丘護岸工事の事前調査による発掘品である。この陵は、典型的な前期古墳の一つとされ、前方部墳頂出土の埴形須恵器および外堤出土の土師器・埴輪がそれぞれ本誌第23号および前号に紹介されている。

出土品は、大部分がいわゆる古式土師器片で占められ、本格化しつつある畿内の古式土師器の研究に幾分かの寄与をしよう。また、中期的な様相の看取される埴輪円筒部片、須恵器片、中・近世かと思われるカワラケ・陶磁器片等も混っており、築造をはじめとするこの陵の沿革を窺う資料となりうるものである。

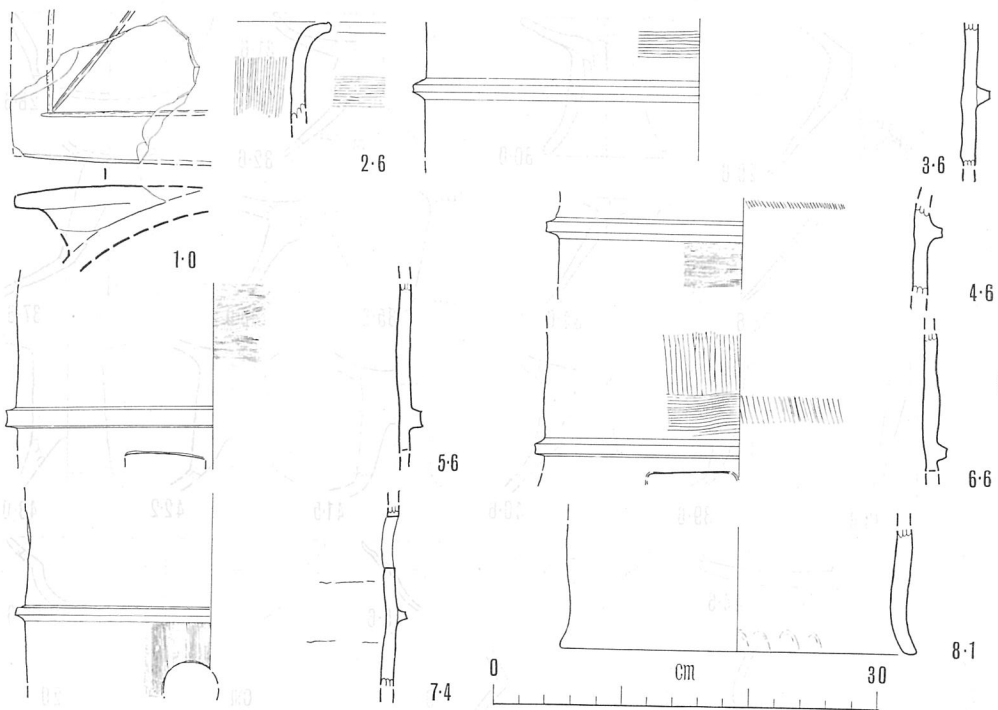
さて、昭和46年の発掘調査は、第一・二および一〇遑の墳丘裾部から遑底にかけて幅2m弱、長さ7～15mの発掘区を八箇所（第一図の算用数字）に、その各一部を試掘した。調査の結果、地山を修形した原初の墳丘の裾・葺石のほか、葺石状の集石・石列および遑底の遺構の存在が確認され、土師器・埴輪片等の遺物の多くは、二次的な堆積層中より検出された。一部には、原初の墳丘あるいは葺石らしい遺構に伴う遺物も出土したが、遺構としての認定や性格付けが明確にできなかったり、後世の混入品があったり、出土層位が不明確であったりして、原初遺構の伴出品を特定できない。したがって、この陵の築造時前後の土師器を層位的に把握することは、今後の課題として残さざるをえない。

一一

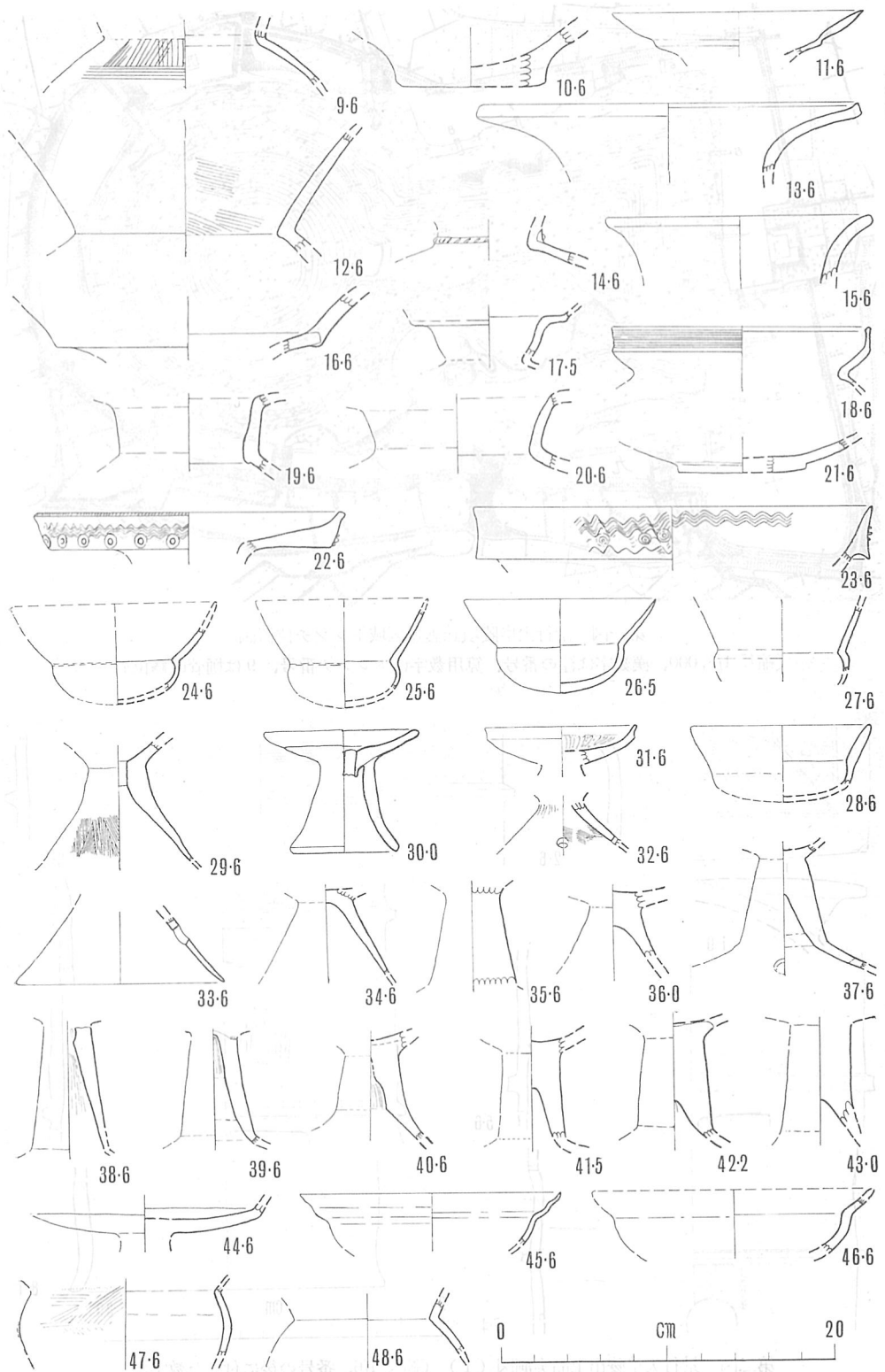
(一) 埴輪（第二図1～8）
盾形埴輪（1）



第一図 景行天皇陵墳丘護岸区域トレンチ位置図
 (縮尺 1/3,000、漢数字は遡の番号、算用数字はトレンチ番号、9は樋管改修位置)



第二図 景行天皇陵出土品実測図(1) (縮尺 1/6、番号の後に付した数字は
 出土したトレンチ、ただし0は表面採集、以下同じ)



第三图 景行天皇陵出土品実测图(2) (縮尺 1/4)

第一遑前方部角の表採品。盾形の角の部分と思われ、直交する沈線で約4cm幅の縁どりをした中に斜線を沈刻する。円筒部との接合面がよく遺存する。

埴輪円筒部(2~8)

円筒埴輪の口縁部2は、直角に近く外反する口唇の調整は不明だが、それ以下が内面縦ハケ、外面横ハケ。これと同一個体らしい3は、径42cmほどで大きい。形象埴輪の円筒部かも知れない他例は、径30cm前後で、外面を粗い縦ハケのうえに横ハケを加えた例(6)、細い横ハケ(4)や縦ハケ(7)を施し、内面は、細い横ハケ(5)のほか斜めのハケ目の上を横ナデする(4・6)ようである。いずれの突帯も細身の高い断面方形の貼付突帯で、横に水平に走るしっかりした造作である。8は基底部で、内外面調整不明。透窓は、小さな円形のほかに方形の一辺らしいものが認められる。その配置は、突帯をはさんで直角の位置に円窓を配する例(7)が知られる程度である。

(二) 弥生式土器(第三図9・10)

9は壺形土器の肩部で、櫛描きの直線文を頸部近くでは縦に、その下では横に施す。10は、厚手の鈍重な感じの底部。

(三) 第一群土師器(第三図11~48、第四図49~62)

いわゆる古式土師器を一括した。

壺形土器(11~23・48)

大型の直口縁のもの(12)、大きく外反するもの(13・15)、複合口縁を

形成するもの(11・16~20・22・23)等がある。このうち、内外両面に細へら磨きを加えた11は高坏の、13・22は器台の可能性がある。14は刻目をつけた突帯が頸部にめぐり、18は直立する口唇部に櫛描き直線文を施す薄手の土器である。22・23は、口縁端部を直立ぎみに断面三角形に肥厚させ、その側面に櫛描波状文を繞らした上に、竹管文を施した円形浮文を配する。23と同じ断面を示す無文のものもある。球形胴に短い口縁を付した壺と思われる48は、口縁に横ナデが認められ、壺の底部と考えられる21は、ハケ目の上にへら磨きをかけている。

小型丸底土器(24~28)

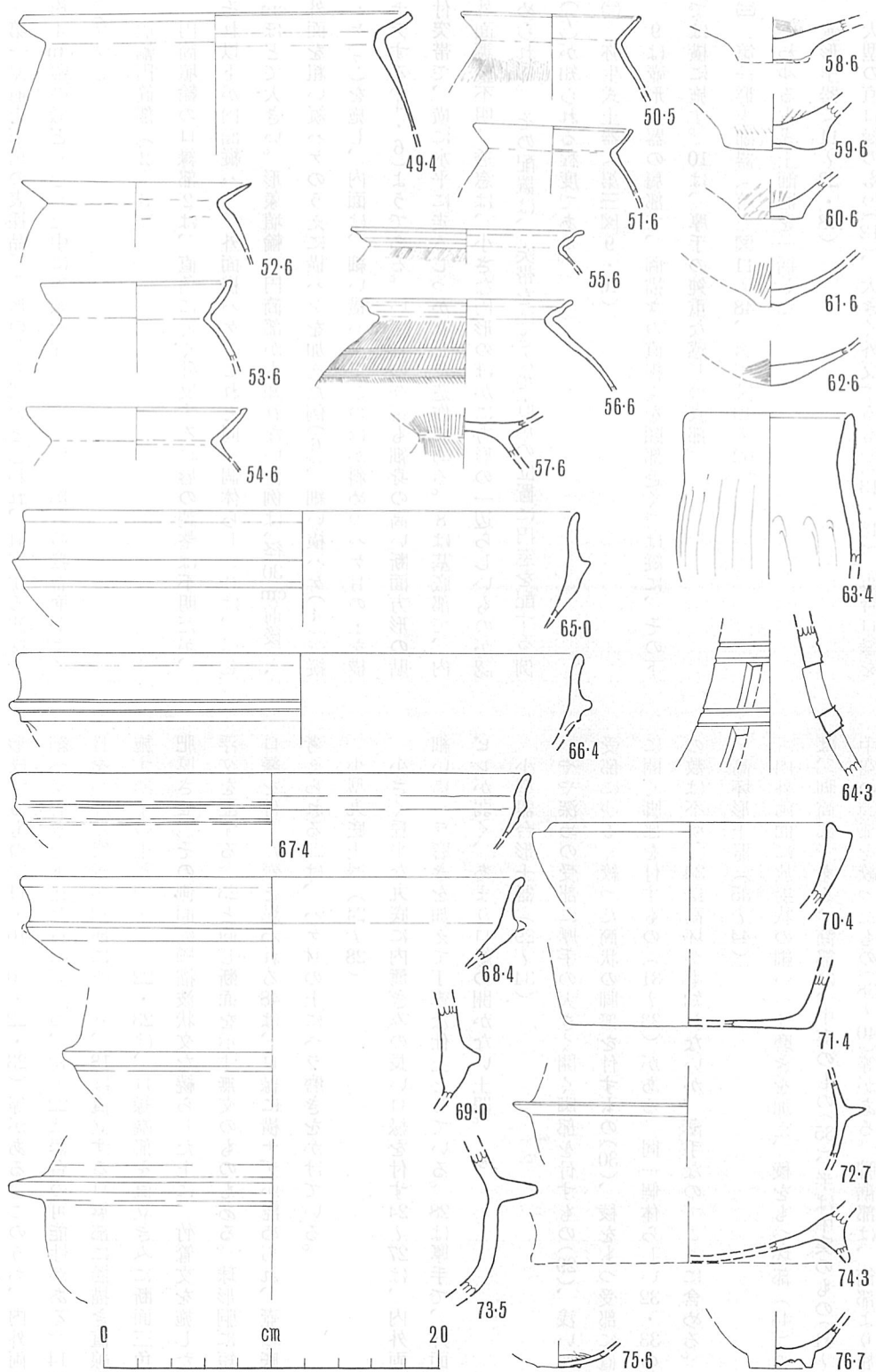
小さく扁平な丸底に内彎ぎみの長い口縁を付す24~27は、内外両面に細い横へら磨きを加えて丁寧な仕上としている。28は厚手で、外面のクビレが弱く、あまり口縁の開かない土器。

小型器台形土器(29~34)

やや深めの受部に厚手の大きく開く脚部を付すもの(29)、浅い皿形の受部にゆるく絞った筒状の脚部を付すもの(30)、稜をもつ受部に直線状に開く脚部を付すもの(31~33)がある。同一個体らしい32・33の円孔の数は不明。34は高坏かも知れないが、薄手なのでここに含める。

高坏形土器(35~44)

内外両面に放射状の細いへら磨きを加え、稜をもつ坏部(44)のほかは、脚筒部である。筒部は、中実のもの(35)、半ば中実のもの(41~43)、中空の筒部を絞ったもの(38~40)等がある。脚裾部は、筒部より屈曲す



第四图 景行天皇陵出土品実測图 (3) (縮尺 1/4)

る短いものを付すのであろうが、37・40には、やや長めの裾が付けられる類であろう。

坏形土器(45・46)

45は、浅い胴底部に二段に屈曲して外上方に開く口縁を付す薄手の坏で、いわゆる鉄兜である。46は胴底部に直口縁を付した厚手の坏で、ここに示す土師器群の中では、特異な印象を与える。

甕形土器(47・49・62)

49は、口径23cm、なで肩の薄い器壁の胴に大きく外反する口縁を付す。57の脚台部と同一個体のS字状口縁の甕56は、肩部にやや斜行するハケの上に横ハケを施し、楯描きの直線文を思わせる特長的な土器である。50・54は小型の甕で、52が直口縁のほかは、口縁端部を肥厚させ、その多くは内彎ぎみである。胴部は、内面をヘラ削りして器壁を薄くし、外面にハケ目、タタキ目を加える例が多いことが破片より知られる。

58・62は、明確には器種器形の知りがたい底部をまとめたもの。粘土円盤貼付の上底風の平底(58・60)、中央が小さく窪んだ尖底気味のもの(61)、丸底(62)がある。

不明土器(第四図63)

蛸壺か塩壺の口頸部らしいが、陶棺の脚の可能性もある。多孔性の須恵質で黄灰色を呈する。横ナデの口縁部の下は、縦ヘラ削りである。

須恵器(第四図64)

内面に同心円内型でおさえた青海波文、外面に平行タタキ目の甕、小さな丸底の甕等の破片があるが、次の脚台をのぞいて器形の窺えるものはない。

脚台部(64)

平行沈線2本で三段に区画された中下段に方形の透窓を各段三個あてを配する。

第二群土師器(第四図65・72、第五図77・103)

前掲の古式土師器以降の素焼き土器を一群とした。

大型鉢形土器(65・69)

赤褐色ないし茶褐色を呈する粗い胎土の焼きしまった土器で、一または二段の突帯にわずかに外反する口縁部を付ける。69は厚手で口縁も内傾するが、概して薄手である。欠失した胴底部は残存部より更に薄手のようであるが、底部の形態は不明。内面には、口縁部と胴底部との境に弱い稜をもち、内外両面に横ナデを加えている。胴底部にス、付着。

鉢形土器(70)

蓋受様の拵えをもつ胴底部に短い口縁を付す。胴底部は厚手で、丸くすぼまる。内外面横ナデで、大型鉢に同じ胎土。

底部(71)

甕または壺の底部であろうか、平底で直線的に外方に開き、胴部に続く。胎土、焼成、色調は前記に同じ。

羽釜形土器(72)

白橙色の精良な胎土で、焼成堅緻。薄手で内外横ナデ。

小型皿形土器 (77~85)

65~71と同じ赤褐色ないし茶褐色の細砂を含む粗い胎土の焼きしまった底部の凹凸のある手捏ねの土器。やや肥厚した口縁部の多くは、外面を横ナデし、とくに83は、口縁部と底部との境の内面が凹線状に窪むほどナデているが、方向の一定しないナデ目を残す例も少くない。口縁部に部分的なススの付着が認められ、灯明皿と考えてよい。

皿形土器 (86~103)

口径8~12cmと大小不揃いで、黄白色ないし黄褐色を呈し、精良な胎土のあまりしまりのない焼成である。粘土を折返して成形した口縁部の肥厚が著しく、口縁部内外面は横ナデするが、凹凸のある底部は内面に方向の一定しないナデを加えた手捏ねである。底部が大きく盛上った上底は、破片にもない。

(七) 瓦器 (第五図73~75)

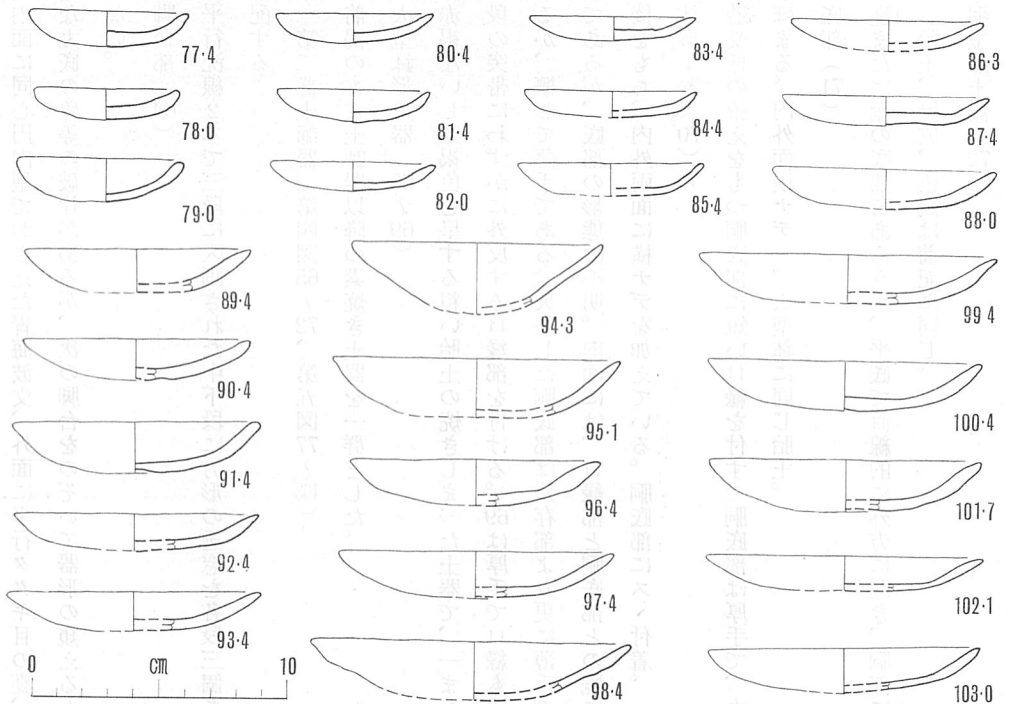
羽釜形土器 (73)

器高のあまりなく、厚手の器壁は、瓦質でロクロ引きかと思われる拵え。内面は白黄色で、外面黒色。

碗形土器 (75)

断面三角形の台を無造作に貼付け、内外両面黒色の土器で瓦質。連弧状の暗文がある。

高台付底部 (74)



第五図 景行天皇陵出土品実測図 (4) (縮尺 1/3)

器種、器形不明。ロクロ引きと思われ、貼付高台を付す。内外両面黒色の土器。

(八) 陶器(第五図76)

碗形土器(76)

削り出し高台付きの茶碗で、近世のものと推定される。

三

以上紹介した弥生時代から近世に至る種々雑多な出土品について、若干の補足を加えておく。

まず、埴輪については、これらが本陵に付属したものであることは容易に推測できる。盾形埴輪は、後円部墳頂に樹立されていたことが既に確認されているが、このたび前方部正面の北角の遺底より採集されたことは、前方部にも盾形埴輪の存在を予想させる。埴輪円筒部は、基底部やその上段を外面縦ハケで調整するが、口縁部をはじめ、予かじめ施した縦ハケを横ハケで調整しなおしている点に注目しておきたい。

次に、第一群土師器は布留式を主体とし、小型丸底壺・小型器台・内彎する口縁端部の肥厚する甕、S字状口縁の甕および坏等の類例を平城下層遺跡に求めることができる。また、庄内系(22・23)・酒津系(18・37)・東海系(55~57)とともに布留式の新旧両傾向が混在し、堆積層からの出土ということもあって、一括資料と考えるのは即断にすぎよう。

第三に前記と関連して、第一群土師器の由来については、①陵外から流水とともに運ばれてきた ②封土の中または下に埋蔵されていたものが流出した ③墳丘の表面に置かれたものが流出した等の三つの場合を想定してかかる必要がある。

第二群土師器については、近世かと考えられる陶器を伴出し、いわゆる「赤土器」「白土器」のカワラケに、肥厚した折返し口縁で、底部内面に指ナデの沈線をもつもの(83)があつて桃山期のものに類似するところから、おおよその時期が限られそうである。近世の地図に、この陵の前方部に阿弥陀堂、観音堂が記載されていることも併せ考えるべきであろう。

以上、景行天皇陵の出土品は、種々の問題点を含んでおり、今後に残された課題も大きい。大方のご教示を賜りたい。

最後に小稿を草するにあたり、東京教育大学の岩崎卓也先生・院生加納俊介氏、文化庁の田中琢調査官をはじめとする記念物課の諸兄、東京国立博物館の林屋晴三氏に種々ご教示を頂いた。また実測図の一部は、関川尚功氏の原因によつた。記して謝意を表する次第である。

(笠野 毅)